

## Special Feature

# ものづくりの現場からの提案

## 左官のすばらしさを人に伝える

野宮未葵 [左官職人]

### 「身近に左官の美しさ」をコンセプトに

私が会社を辞めてから、半年経とうとしています。手探りながらも個人で仕事を請けるようになり、これまでに多くの人と、特にお施主さんとお話をするようになりました。現場に行きすぐに鏝を持ち始めるのではなく、お施主さんとお茶を飲みながら材料やパターン、色や手触りなどの話をし、お施主さんの欲しているモノ、イメージを引き出すところから仕事が始まります。現場に出てまだ間もないころ、親方に「仕事はな、下準備が8割で鏝で塗るのなんか2割しかないんだ」と教えられました。なるほど一から自分でやるようになって初めて実感できた言葉でした。下準備とは本当に人が欲しているモノを探り当てる時間であると、私は理解しています。

「漆喰ってこんなふうに塗れるものなのですね」。つい最近、お施主さんと一緒に壁を仕上げる現場があり(写真 1、2)、一緒に作業をしながら言われた一言です。お施主さんいわく、漆喰はもっと手が届かないものだと思っていた、磨きや押さえの壁のようなものだけだと思っていたとのことでした。左官の表情の豊かさや良さは私が知っているだけでは伝わらないと痛感した瞬間でした。

左官を知るだけでなく、もっと手元に左官を置いてもらえるものづくりをしていきたいと思っています。たとえば、研ぎ出しは、小学校の外の手洗い場や公園の遊具の滑り台などでよく使われていた技法です。セメントと砂利や砂を混ぜて固め、後からスベスベに研ぎ、石の目を模様として見せるのです。水や汚れに強く耐久性にも優れていますが、今では施工の大変さから少なくなっている技法です。材料としては床、壁の下地をとる時のモルタルとまったく同じ材料ですが、それを研ぐだけでこんなにも綺麗な表情をみせてくれます(写真 3)。

左官を、アクセサリや小物といった、今までの使い方とは別の方向から触れてもらい、身近に取り入れてもらえたらと思い、制作しているものです。



写真1 一番最近の仕事。真っ赤なアンティコを仕上げている。お施主さんも一緒に塗ったり作業をしてくれた



写真2 同じ現場にて漆喰仕上げ中。お施主さんに塗ってもらったあと、その鏝跡を活かしつつ仕上げている



写真3 セメントと砂利でできたアクセサリーや小物。研ぎ出しの技法を使って美しく仕上げている

## 大学から左官屋へ

新卒で入社して6年間、私はその会社で今のベースとなっている左官のイロハを学びました。鏝の持ち方よりも、“現場”という名の独特な社会の渡り方を学ぶほうが大変だったと思います。一人でマイペースに作品をつくり続けていた大学時代とは正反対で、現場で見知らぬ人たちと一つのものをつくり上げていくという環境に戸惑いながら現場というものを学びました。その会社では4年間の見習い期間が設けられています。その名の通り、職人さんの仕事を見て、仕事を教えてもらい、学生のように守られる期間でした(写真4)。日々できる仕事が増え、褒められ、怒られ、力仕事や夜作業といった大変なことも糧と思えるほどの楽しい学びの期間であったと思っています。(写真5)。しかし生意気なことにある程度仕事ができるようになってしまうと、なにやら仕事に物足りなさを感じ始め、私が左官屋を知った日のことをよく思い出すようになりました。



左/写真4 見習いのころ  
右/写真5 技能試験の練習中

私が左官屋を知ったのは高校3年生の大学受験真最中のときでした。私の実家は今も昔ももう珍しくなってしまった木舞を組み、土を塗った家を建設中で、左官屋に限らずいろいろな業者の方が出入りしていました(写真6)。徐々にでき上がっていく家を見るのはいつも学校帰りの職人さんが帰ったあとでした。その日も夕方ふらりと家を見に行きました。そこで出会ったのは竹工の虫かごのように家の形に編まれた木舞と柱が、眩しい西日によって光と影で浮かび上がっているという光景だったのです。建築物というよりも大きな工芸品のような存在感と美しさで、それはもう職人さんの作品と言えるものでした。言うまでもなくそれはただの下地であって、すぐに土や漆喰を塗られ素敵な壁となりました(写真7)。しかし、その隠れた下地が塗られた壁の価値を、私の中で上げていたように思います。

その後無事に美大に合格しましたが、卒業までにその日見たものを忘れるほどの感動には出会わなかった私は、就職活動で迷わず左官屋だけを探していました。



実際、左官屋に就職して当然のごとく、現場では木舞や土などを触るところか見ることにほとんどありませんでした。一般的に高級左官と思われている土壁や磨きの壁というものは、ほんの一部の左官屋の仕事であることを知り、逆に組積工事や防水、吹き付け、タイル仕事まで左官の領域に入っているということを知ったのです。前に書いたとおり私は木舞や土壁に興味と憧れを抱いてこの世界に入りましたが、しかし日常ではそんな仕事はほぼありませんので、有名な左官職人さんが先生を務める講習会に行き、教えてもらったりしていました。

また、いつもの仕事で使っている鍬の値段は1,000円から5,000円というところですが、土壁や磨き壁の鍬は2万円以上という、一年に一度使うかどうかという状況では一瞬買うことを悩んでしまう値段なのです(写真8)。そんな環境で、あの私を感動させた世界は左官屋になってもとつきにくく、高嶺の花のような存在になっています。左官屋から見ても高嶺の花であるものが、一般のお客さんにとって身近になろうはずがないのです。手に入らないモノはいつか忘れられるか、似たものに取って代わられてしまうのではないのでしょうか。



写真6 私がはじめて左官屋を知った建設中の実家。まさに左官屋さん木舞に土を塗っているところ。10年以上前の話だがここにも女性の左官屋さんがいた



写真7 完成した実家



写真8 なかなか日の目を見ない鍬たち。せめて使う時まで錆びさせないようにと、大切に手入れをしている

## いいモノにするための提案

左官屋であれば、土壁や磨き壁に限らず、さまざまな材料の美しさやメリット、デメリットを知っています。言われたままを施工するのではなく、いいモノにするための提案をすることができるのです。

「左官屋は水商売だ」と言います。気候、湿度、温度、材料の状態、下地、すべての条件に毎回対応しながら毎日仕事をしていきます。毎日いろいろなことに気を配り、仕事をいかに効率よく美しく納めるか悩み、工夫しているのです。現場でどんなに困った状況に陥ろうとも年配の職人さんが慌てているのを私は見たことがありません。

お施主さんや設計さん、デザイナーさんのあらゆる要望に応えられる技術を持ち、一緒に創作することを楽しめる職人さんが巷にはあふれていると思います。とはいえ現場で「そんなんでできるわけねえ」と職人が断言してしまうのを聞くことは多々ありました。できないと言ったらすべてはそこまで止まってしまう。しかし職人さんの「できるわけねえ」は大概「それは美しくない」という意味だと私は思っています。その一言の中には、材料の性質や乾き、ほかのものとの取り合い、細部の収まりなどを考慮した上で、もっといい納め方がある、という多くのものが詰まっているのです。

神は細部に宿る、職人としては常に念頭に置いておきたいほどの名言であると思いますが、木を見て森を見ずというのもうなずけます。細部を見る日はお貸しできます。反対に全体を見る目を貸していただければ、違う角度からの美しさを発見できるチャンスになるのではないかと思います。

-著者紹介-

野宮未葵（のみやみき）

2003年多摩美術大学工芸科ガラス専攻卒業。働かせてもらえる左官屋を探して奈良、群馬と放浪し、最終的に東京の原田左官工業所にたどり着く。原田左官で左官を学びつつ、北欧やモロッコなどを旅し、海外建築のデザインや技術に興味を持つ。2012年一級左官技能試験取得。今年、「オリジナルの左官」「左官を身近に」をコンセプトに独立。MIKIMADEを屋号に、主にモルタルを使って作品をつくりながら、左官仕事に精を出す毎日

